

(続き)

昭和39年6月、市内でいち早く救急病院の指定を受けた。しかし病室は常に満床に近い上、医師不足でもあり、救急の受け入れに懸念が示されていたようだ。

そこで、松山市民病院として社会に果たす役割と課題に取り組むためには、財団法人の設立が最善の方法だということになり、その年の11月に財団法人永頼会が設立された(「永頼」は書経中の大宛謨にある「萬世永頼」が典で、命名は薬師寺眞氏、のちに財団の会長)。今まで松山生活協同組合立として運営されてきた病院は新たに財団法人に委ねられ、診療体制はそのまま継続されることになった。

財団開設時の従業員数は114人(医師8人、看護婦55人、薬剤師2人、事務員19人、検査技師2人、放射線技師1人、栄養士2人、調理師8人、他17人)であった。

すぐにも病棟の拡充が必要となり、昭和41年に4階部分が増築され、続いて昭

和44年には東隣に5階建てが増築された(第3次増築計画)。昭和45年にはさらに第4次増築計画が発表され、昭和49年7月に三番町通りに面した新病棟(旧S棟)が完成した。病床数は503床となり、大病院の仲間入りをするようになった。

その後は老朽化した建物の建て替え工事が続き、病院発足時の木造2階建ての管理棟は昭和53年12月に建て替えが完了し、永頼会館と名付けられた。昭和36年から45年にかけて建築した病院棟の建て替えは平成6年8月に完了した(N棟)。

そして平成26年10月現在、昭和49年

建築の南棟(旧S棟)の建て替え工事で、来年春完工予定である。これで昭和31年発足から約60年足らずの歳月で建築・建て替えの二巡目が完了することになる。

昭和31年に20床でスタートした病院も設立からの変遷を辿れば、その当時の医療機関に何が求められ、どう取り組んできたのか、その苦勞と努力が見える。(文:事務長 花本雄二)

昭和44年9月、北側から見た5階建て第3次増築工事完成直前:奥の看板のある建物は昭和36年完成のB病棟。現在、これらはN棟になっており、3階部分に連絡橋が架かり永頼会館と繋がっている。

昭和44年頃の三番町側から見た松山市民病院(のちにN棟に建て替え):写真左奥に元井関農機本社(現在の松山商工会議所)が見える。手前の木造家屋と駐車場に旧S棟がのちに建てられる(現在は新S棟建て替え中)。



「萬世永頼」 薬師寺眞氏 書



## 私と市民病院

## ～ 現役時代を回想して ～



柴田文子氏(写真右から2人目)は松山市民病院設立時に入職された。分院婦長を経て、本院の内科・産婦人科病棟(4B病棟)婦長として、昭和60年に定年退職するまでの約29年間奉職された。

現役当時を思い出し、「昭和の松山市民病院の成長・発展を肌で感じながら、忙しく駆け回った看護婦生活でした。」と語った。看護の初心者から婦長職に至った道のりを「その歳になって、その役に就いてみないと分からないものがあると感じた。」と振り返り、人は一生を通じて、自分なりの人間性に磨きをかけることの大切さを強調された。

原田美智子氏(写真右から3人目)は、病棟や耳鼻咽喉科外来主任看護婦として平成元年12月まで勤められた。昭和31年の落成式当時の白黒写真は原田氏のご主人が撮影され、病院にて保管していたものである。



橋本誠志先生(写真中央)は昭和24年岡山大学医学部専門部卒の内科医で、岡山より昭和32年8月に愛生分院長として赴任された。奥様と5歳の息子さんとともに宇高連絡船で四国に渡り、予讃線での約6時間の長旅の後松山駅に降り立つと、看護婦、事務職員20名ほどの出迎えを受け驚いたそうである。その頃より新任医師の駅への出迎えは事務長以下職員一同で行われていた。

愛生分院は橋本先生の赴任前は本院内科医長の富永先生が兼任で勤務していた。

また、橋本先生は昭和39年11月の財団法人永頼会発足時の発起人、理事としてその名を残されている。愛生分院で4年、その後本院で副院長として4年過ごされ、昭和40年に松山市内で開業された。「今回の新南病棟の完成で、病院建て替えも管理棟、北棟、南棟と二巡目が完了したことになる」と感慨深げに語られた。